



■2013年9月26日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、本年度は11件が採択されました。本号では、シリーズ第7回として、学生総合支援センター鈴木英一郎先生による「学生生活支援実践」の報告をします。

2012年度開講「PBL教育支援プログラム」成果報告(7)

「学生生活支援実践」

はじめに

平成24年度後期に行ったPBL形式を取り入れた本授業について報告する。

本授業は、共通教育における主題I(生きる力とキャリア形成)の1科目として位置づけられている。中でも「キャリア実践科目」として、キャリア教育の要素を加味させながら、授業内で受講生に何らかの実践を課すことが求められるものであった。

授業の概要と背景

本授業では、「学生支援」をテーマとして、その背景にある考え方を理解し、様々な特徴のある学生がいかに充実した大学生活を送るか、そのために同じ学生として自分たちに貢献できることはなにか、についてグループで検討し、それに基づく実践を行なうことを課題とした。毎回の授業は、グループディスカッションを中心に構成され、教員やSAはその間、各グループを巡回し、適宜必要な助言等を与えるようにした。

こうしたグループ作業のプロセスは、多くの職業領域において広く一般的に見られることでもある。よって、本授業を通して、受講生はグループで作業をする際に求められる能力やセンス(感覚)を磨くことになり、「就業力の養成」という点においても重要な意味を持つだろうと考えた。

また、先述のとおり、その内容として「学生支援」を扱っている点と、それに伴い、彼らが日常生活を送る「大学コミュニティ」をそのフィールドとして利用している点が本授業の大きな特徴と言える。「学生支援」をテーマとして、仲間同士互いに支え合う(ピアサポートする)という体験を受講生に提供することで、就業力のみならず、人間的な成長という点においても、とても大きな効果が期待できると考えた。

また、大学コミュニティは、彼らにとってより現実的に問題意識を持つことができ取り組みやすいフィールドであり、活用しやすいリソース(援助資源)に溢れているという点も大きいと考えた。

方法

①オリエンテーション

～各グループによる学生支援企画の立案～

まずは、現在の本学における学生支援方策やその背景について、担当教員(筆者)が解説をした。その後、グループ毎のディスカッションで、学生支援に関する本学の現状や、そこに見られる強み、不十分な点を検討させた。さらには、その不十分な点を改善・解消するために、自分たちの持つ力やリソースを使ってどんな貢献ができるかについて検討を続け、グループ毎に自分たちの強みを生かした何らかの「学生支援企画」を立案させた。

②企画プレゼン大会

立案されたグループ毎の企画は、授業内で2回行われる「企画プレゼン大会」で発表させた。発表の際には、自分たちの企画を説明すると同時に、行き詰っている点や自信が持てない点について、積極的に他の受講生に意見を求めるようにさせた。各グループは、発表で受けた指摘を参考にして更にディスカッションを続け、企画案をブラッシュアップさせていった。

③企画の実践

実施準備が整ったグループから、検討してきた企画を随時実践していった。なお、今年度の授業で行われた活動はTable1のとおりである。また、実践を終えたグループから、後述する「実践報告会」でのプレゼンやアカデミックフェアでの発表に向けて、反省や振り返りを行った。

④実践報告会

授業の最終回では、グループ毎の実践に関する「実践報告会」を行い、その成果とともに、自分たちの活動の意義や効果について考察した結果を発表させた。また、「お疲れ様コメントシート」を用いて、他のグループの取り組みに対してポジティブなフィードバックをするよう指示した。

⑤成績評価

毎回の授業では、受講生に、その回にグループで行った活動、自身がその中で果たした役割、今後の活動に向けての課題等を振り返るための「振り返りシート」を記入させた。この「振り返りシート」は提出の必要はないが、期末レポート作成のための基礎資料として各個人で保管させた。

期末レポートでは、この「振り返りシート」を基にしながら、授業を通して自身が身につけた能力や磨いた感覚を各自に報告させた。加えて、自身のグループ活動への貢献度を10点満点で自己評価させるとともに、貢献度の高かった他メンバーの名前を挙げるよう指示した。これらは、彼らの評価が、その実践内容の良し悪しで単純になされるべきものではなく、あくまで自分自身あるいは自分たちグループの主観的な体験や気づきを通して自己形成されるべきものである、との考えに基づくものである。よって、個人の成績評価は、この各自のレポートに記載された「自己評価点」をベースとして、そこに「授業への出席」や「他メンバーからの評価」の要素を加味する形で行った。結果として、受講生全員がきちんとした振り返りを伴ったレポートを提出しており、これに基づき単位認定を行うこととなった。

⑥最後に

この授業を開講するのは今年度で3回目となった。毎年、少しずつ微修正を加えながら実施しているわけだが、つくづく実感するのは、PBLという自由度の高い枠組みの授業を円滑に進めるためには、担当教員が、受講生が元々持っている資質や考えをいかに信頼できるかがとても重要だということである。特に、本授業で扱う「学生支援」とは、その言葉のとおりに「学生に対する支援」という意味であるが、対象が「学生」であるならば、その学生について一番よく分かっている専門家は実は当の学生自身である、という認識からスタートしている。この信頼感が、彼らを主体的にして、時には授業時間外であっても必死に作業に取り組むモチベーションを生んでいるような気がしてならない。

一方で、先述の成績評価方法については、様々な議論があるだろう。PBL形式の授業における適切な成績評価のあり方とはいかなるものかについては、私自身も引き続き検討していきたいと考えている。

(鈴木英一郎)



グループでの実践活動の様子

表1 各グループが取り組んだ実践活動とその概要

グループ	取り組んだ実践活動	概要
Aグループ	三重大生に三重大学の魅力と癒しを届ける三重大マップの作成	「新入生に伝えたい三重大学内のお楽しみスポットや癒しの場所」について三重大生に対してアンケート調査を実施。この調査結果に基づいて、A4三つ折りサイズのキャンバスマップを作成し、新入生に配布予定。
Bグループ	先輩と後輩を繋ぐ交流会の実施	「先輩から有用な情報を得たい後輩」と「後輩に自身の経験や知識を伝えてあげたい先輩」とを繋ぐことを目的に、昼休みを利用して、学部単位での交流会を実施。ポスターの作成等の広報活動や利用できる教室の確保なども自分たちで行い、参加者からも一定の評価を得た。
Cグループ	ワンコイン料理教室の実施	教育学部家政科にご協力をいただき、一人暮らしの学生が料理に関心を持って自炊できるように、ワンコインでできる料理教室を開催した。当日は家政科の皆様のご指導の下、グループで親子丼を作成した。また、余った食材を利用できるアレンジレシピ集も作成して参加者に配布した。
Dグループ	留学生にも分かる三重大周辺ガイドブック作成	渡日直後の留学生にとって、三重大周辺で生活を始めるのに便利な周辺マップ(ガイドブック)を作成。文字の大きさやルビを振るなどの点でも工夫をした。新年度の留学生ガイダンスで配布し、その使い勝手をアンケートで確認する予定。